

京鹿子

九月一日
九月一日
九月一日

9月号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 其 の 十 二

打 水 や 笑 く ぼ の 緩 む 襷 掛 け
溶 け て ゆ く 水 玉 模 様 大 夏 野
醒 め 遣 ら ぬ 夏 野 の 影 や 雲 ひ と つ
天 与 な る 産 屋 の 里 や 青 田 風
青 田 風 十 戸 の 里 の 毛 原 可 な
相 好 は 崩 さ る 羽 目 に 夏 休 み



倒錯の渦の真ん中なめくじり
膝づめの謀議やはらの秋扇
遁走は失意の果ての大百足
裏書きの連署の翳り紙魚走る
無機質の怪獣ゾーン夏帽子
機関庫へ夢の連結蟻の列
ジオラマの0系我が銀河あふれ
喧噪をたたむ夏蝶樹下の闇

— 近 詠 —

鈴 鹿
仁

福知山慕情

涼しさの長安ここに俳ごころ (長安寺)

詩のごとく棚田ひかりて梅雨晴間 (毛原の棚田)

滴りや酒呑童子の風便り (大江鬼の里)

青葉やみ産屋の冥さ深くせり (産屋の里)

風誘ふよもやまばなし大原志 (大原神社)



— 近 詠 —

和田 照海

野風呂岬

呂仁新宰瀬戸内の祖父の句碑を訪う

目まとひも連れて雨意なる野風呂岬

青 卯 浪 梯 子 徑 なる 句 碑 岬

呂 と 仁 を 結 ぶ 俳 系 南 風 の 島

祖 の 句 碑 へ 序 章 の ち か ひ 五 月 風

石 鎚 を 指 呼 に 収 め て 岬 朱 夏



松本 鷹根

帰郷航

晩齡につく梅雨蝶や瀬は滾つ

御土居守る矜恃を仰ぐ梅雨大樹

刻委ぬ学びの神の緑蔭に

紙屋川みどり深めて音を呑む

黎明を飛魚あどの飛び交ふ帰郷航

近詠



沙羅

塩貝 朱千

優しき目あけしまま落つ風の沙羅

沙羅沙羅と舞ひて真白き霧ふやす

沙羅に雨薄明の中溺れぬる

眩きの尾を曳いてゆく沙羅の闇

花沙羅の影を残して消えゆきし

英華採集

はたと止む団扇の波や土俵際

京 都 松 本 美代子

大相撲夏場所の棧敷席の景を詠まれたもの。体育館で行われる本場所は、空調設備があるものの土俵際の砂かぶり席は、余り冷房の効き目がない。手に持っている配られた団扇の動きが、実に端的に土俵上の攻防を物語っている。固唾を飲む時が、「はたと止む」である。一瞬の動きをリズムミカルにとらえている。

種袋振りて明日の音を聴く

福 山 石 原 孝 人

春の田畑に蒔く穀物・野菜等の種が入っている種袋。種を蒔く時には、成果品としてのあるべき姿を想像するのであろう。種袋を振りながらその音を聴き分けるのは、楽しいことに違いない。その楽しさが明日の音となつて、作者の耳に残り幸せを噛みしめるのだ。

粽解く子供の躰終へし如

奈 良 福 嶋 正 一

五月の節句に、粽を食べる習慣が昨今薄れてきたように感じられる。神仏に供えるために作られるもので子供の健やかな成長を願うものである。作者が、粽を解いて感じるのは、子供が成長した今、子供の小さい頃の数々の思い出に違いない。子供に対する躰が、甘かったのか、厳しかったのか。今はもう見守るしかないのである。



夏の山藤岡紫水
 宵螢女は爪に火を点す
 風立つや水に色添ふ花菖蒲
 音なさぬ音を聴きたり竹落葉
 夏山を沈めて湖は波たたみ
 耳に來し蚊に浅き夢奪はるる

霧の中 沼田巴字

肩寄せて生きるほかなし霧の中
 新松子早死たりし学徒兵
 颯雲遊行せよとの師の教へ
 一人して笑ふことあり唐辛子
 ぎこちなき身をば嘆かん敬老日

空蝉 丸井巴水

麦酒泡髭に咲かせて憂さ晴らす
 コホロギの鳴き疲れたる仕舞風呂
 空蝉は背割りて待てり宵の風
 雨蛙急ぎ鳴きせり詰め将棋
 花が実になる暗がりの風すずし

白牡丹 伊藤希眸
 嘴はしぶと太鳥の集まる憲法記念の日
 神影の瞬と間を映せり白牡丹
 逃げ水を追ひし一生太刀飾る
 葉蘭ゆれ白髪になじむ夫婦椀
 水甕に音なく棲まふ初夏の月

梅雨穂草 北川孝子

シヨパン聴く梅雨冷えの耳やはらかし
 一日を一語に執し梅雨穂草
 気づかひの本音聞き出す青時雨
 自己流のしあはせに足り梅雨深む
 乳足りし赤児の眠り山したたる

五月闇 直江裕子

ふはふはのガラスに春を吹き込める
 王様の耳ロバの耳五月闇
 新緑や少年の四肢発光す
 母よりも生きて新茶の風のいろ
 目鼻なき仏は石に青葉梅雨



詰め物 高木晶子

びつしりと青梅乾坤鴉声待つ
わが色はまだ決められぬ薔薇祭
芍薬を剪れば地獄へ落ちさうな
青葉若葉罪の重さは多数決
青嵐詰め物多数取り除く

活火山 木戸渥子

卯の花腐し胸に小さな活火山
日本列島しぼれば梅雨のしたたれり
梅雨寒や何もしないといふ不自由
短夜の俳句欲しがる脳細胞
夏の夜は長編よりも短編を

日本手拭 奥田筆子

乙鳥くる日本手拭目じるしに
くだもの屋台かたむきて夏が来る
おじやがの芽どつこい生きて現況届
糸遊や知覚過敏の京都弁
校壁の解体新書鳶の遺書

花氷 井上菜摘子

薔薇の棘に雨ふる天使突抜町
賽銭のひとりの音や青時雨
青葉木菟本音洩らさばさらに闇
初夏のピアノの蓋があきつばなし
どこかで聞いた話花氷痩せる





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

はたと止む団扇の波や土俵際

京都 松本美代子

波団扇話まとまりさうもなく

雑魚金魚ひと掬ひして量らるる

さみだるる今日の一日を一人酒

街薄暑流して通る竿竹売り

成るならぬ風のうはさも柿の花

送り梅雨心支度に地図広ぐ

種袋振りて明日の音を聴く

福山 石原 孝人

短夜や惜しむ父子の長話

後継ぎのことを話して柏餅

砂漠の地続く炎暑に風死なず

一坪の棚田オーナー夏燕

大夕焼柱サボテン影長し

大夕焼考愛用の鍬洗ふ

夏近し空に白雲深呼吸

粽解く子供の躰終へし如

奈良 福嶋 正一

庭の花より美しき四月かな

粽食ふ子の先づ越すは母の丈

月涼し忘れし頃の夕空に

オハイオ 水谷 直子

アリゾナ 伊吹 之博

古里の便り間遠に花は葉に
遠嶺の雪形やせて田水引く
吹き渡る風に色あり麦の秋
旅果てて柳絮舞ひまふ家路かな
花つつじ塀より溢る通学路
人混みをかきわけ行くや祭の子
祭人今日一日は雲の上
若葉風乳母車押す三才児
駆ける児を追ふ母若し五月風
数回の転居に耐へし門の薔薇
生垣を刈り込む夫婦恙なし
此の児にも戦無き世を鯉幟
何でもない日暮青梅転がりぬ
大門の先に江戸あり夏帽子
梅雨の夜や黙つて添へる銀の匙
千年の幹ゆく蟻や震度四
母の日の子等を見送りお茶を汲む
トンネルを抜け一雨の茶畑輝る
初夏の三河路に買ふ「うみあーつ」手羽
後を引く味噌串カツや夏きざす
青梅の落ち刻を知り雨を呼ぶ
和の色を噴き出すやうに菖蒲咲く

札 幌 野村 鞆枝

ばら香る介護タクシー寄り道す
路地からの飛び出し注意夏の蝶

遠河鹿一輛電車過ぎしより

海境の太き走り根夏を抱く

貝閉づるとき夏衣触れにけり

あめんぼう堤に眠い昼下り

画遊師の蔬果涅槃図や青い鳥

麦穂波いづこに白を置き忘る

縁遠くすがりつきたき蜘蛛の糸

若葉雨芯の隙間を豊潤に

赤信号突つ切る憲法記念の日

自分史にまだある余白更衣

老鶯や音なく過ぐる通り雨

あのカフエのあの日のソーダ水二つ

練習のギター音こぼるる窓若葉

薫風やコンビニ改装待遠し

ボケ防止クロスワードに夏籠る

更衣身に痛みあり助けらる

運筆の妙技競へる夏燕

手みやげの筍ずしり郷訛

麦の秋風の足あと眺め入る

夏の原いざ生きめやも風立ちぬ

習志野 上野 紫泉

船 橋 元橋 孝之

金子 正道

東 京 野中 圭子

丹羽 武正

松 戸 岡山 敦子

千 葉 高野 春子

布川 孝子

酒 田 藤波 松山

さいたま 神田 惣介

千 葉 高野 春子

千 葉 高野 春子

千 葉 高野 春子